

「別に私たちは本当に結婚するわけじゃないのに……」

「ウエディングドレス着ないの？ とかさ、聞かれるのは困ったよね」

おおかた提督が子供相手だと思つて駆逐艦の誰かに口を滑らせたのだろうが、今日の昼にケッココンカッカカリの指輪の授与を行う予定だと駆逐艦たちの間には前もって噂が広まっていたらしい。それならむしろ当事者の自分たちにも前もって知らせて欲しかった、と大井は思う。

ケッココンカッカカリの申請と指輪の受け取りに中央に出頭した提督が、帰ってきて目にしたのは結婚式場のごとく綺麗に飾り付けられた執務室だった。撤去するわけにも行かず、呼び出された大井と北上はそんな執務室で指輪の授与を受けた。

駆逐艦たちは執務室を飾り付けるだけでなく、指輪を付けた雷巡のふたりが執務室から出てくるのを待ち受けて紙吹雪を撒いてくれた。幼い駆逐艦たちの素朴な結婚式への憧れを投影した自分たちへの視線はむずがゆいものがあった。

「それにさあ、提督、格好良かったねえ。大井つちもそう思うでしょ？」

「まあ、普段からあのくらいにしてくれればいいと思うけど」

忙しさにかまけて制服を着崩している提督もさすがにそれはどうかと思うくらいの頭はあつたらしい。今日の指輪の授与の時は、一分の隙もない格好で決めていた。あまりにも珍しいことだったので、執務室に呼び出されたとき大井は飾り付けより

も提督の姿にまず目を奪われてしまった。けれど、その事はなんとなく北上には言いたくない。

「またそうやって。大井つち、もつと素直になりなよ…… そうしないと……」

北上の言葉が途切れ途切れになり、そのまま彼女は寝入ってしまう。すやすやと気持ちよさそうにする北上は大井は毛布を掛けてやる。

髪もほどかず、着替えもせぬままだが明日は休みだ。無理に起すよりもこのまま寝かせておいた方が良さだろう。

何だか目が冴えてしまってしばらく眠れそうにない。ケッココンに伴う特別休暇とやらで、北上と大井は明日の業務を免除されている。

「素直に、ね……」

何となく大井は左手を目の高さに挙げてみる。窓から差し込む月明かりに、薬指にはめられた指輪が輝く。

ふと思いついて指輪に口づけようとしてみて、直前で思いとどまって止める。

「……何してるんだろ、私」

自らの行動に苦笑し、大井はため息をつきながら自分のベツドに腰を下ろす。

そろそろ認めなければいけないのかもしれない。自分が、指輪をもらって——ケッココンの相手として選ばれて——舞い上がっている、のだと。